歴史紀行

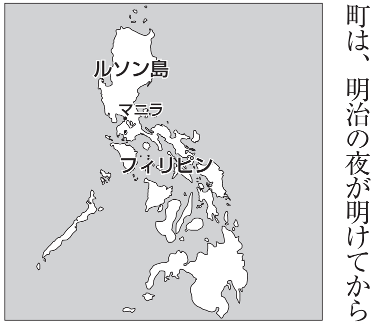
戦前・南洋の日本人町を歩く

第二部　マニラ日本人町の先駆者たち（上）

作家
太田尚樹

●おおた・なおき　1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作から昭和史を発掘するノンフィクションまで、幅広く執筆。最新刊は『尾崎秀実とゾルゲ事件』。

シンガポールに始まって、今まで辿ってきた日本人町は、明治の夜が明けてから、海を渡って行った人間たちによって形成された。多くはカラユキさんたちが主役という、若い女性が海外に進出した、歴史的にも珍しい異形の日本人社会であった。



南蛮貿易とルソン

だが、これから辿るフィリピン、インドネシア、タイ、ベトナムにみる日本人町の歴史は鎖国以前に遡り、多くは交易商人たちが先達となった。

彼らが目指した南洋の地では、キリスト教を避けて通れない事情もあったことから、日本人の交易商人の背後には、長崎大村と平戸、豊後（大分）などの、切支丹大名の存在も見逃せない。

安土桃山から江戸時代にかけて、南蛮船と呼ばれたポルトガル、イスパニア（スペイン）の貿易船、さらにオランダ船、英国船が日本に来航すると、日本からも御朱印船が南洋の各地に出て行った。なかでもルソン（呂宋）に渡って行った日本人は、記録によれば、文禄二年（一五九三）だけでも四百六十人に達している。

これは日本船で渡って行った人間の数であり、南蛮船に便乗した者もいたはずなので、この人数はさらに増大する。

NHK大河ドラマ『黄金の日々』では、実在の人物、泉州・堺の商人納屋助左衛門がモデルであった。小説化されているとはいえ、自らの持船で目指したのがルソン島マニラであった。

南蛮船が日本に持ち込む品は、彼らが支那貿易で扱う生糸、絹織物、砂糖、蜂蜜、蠟などで、日本から輸出したのは、良質の小麦粉、銀、銅、鉄、船具、漆器、塩魚、火薬の原料になる硝石、刀、槍などの武具、漆器、屏風、扇子などであった。後に鎖国になると、南蛮国側にとって痛手だったのは、軍事に不可欠な品々の欠乏だったという。

記録に載った日本人の活動

先の文禄二年の日本人渡航者の記録より以前、ルソン島近海における日本人の活動状況を伝える資料が、スペイン本国とフィリピンに数多く存在している。

そもそもスペインが、ルソン島の占領宣言をしたのは一五七〇年（元亀元年）。だがそれより三年前の六七年にスペイン艦隊司令官レガスピから、本国のフェリペ二世国王に宛てた報告書には、「ルソンと称する島には、支那と日本の商船が毎年、交易に来航する。彼らは先の品々をもたらし、日本人は支那人、現地の土人と商いをし、金や蠟、鹿皮などを持ち帰る」と書かれている。

スペイン艦隊がルソンを占領したとき、彼らはマニラで一人の日本人を見かけた。「男はイエズス会の僧が被る帽子をかぶっていたので質してみるに、彼はこれを肯定して名をパブロと名乗り、首に十字架を下げていた。彼は数珠を求めてきた」という記録もある。時期からみて、鹿児島あたりで受洗した日本人であろう。

スペインにとって「黄金の世紀」といわれた十六世紀、その絶頂期にあった国王がフェリペ二世であった。

フィリピンの拠点はルソンのマニラだが、島の数は七千を超える。そこでこの海域の島嶼を植民地にしたスペインは、国王フェリペ二世の名を取ってフィリピーナスと複数形で呼んでいたが、一八九八年の米西戦争に敗れ、アメリカの統治下になって英名